

【基盤研究(S)】

人文社会系 (社会科学)



研究課題名 現代日本における階層意識と格差の連関変動過程の実証的説明

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授 **きっかわ とおる 吉川 徹**

研究分野：社会科学、社会学

キーワード：社会調査法、階級・階層・社会移動、文化・宗教・社会意識

【研究の背景・目的】

豊かさや地位についての人びとの捉え方（階層意識）は、近年の格差化・貧困化のなかで大きく変貌しているといわれており、社会的な注目を集めている。にもかかわらず学術的な議論は十分とはいえない。

本研究では平成期の日本社会に焦点を定めて、社会調査計量と実験—数理モデリングという2つのアプローチから、格差実態と階層意識の連関変動のメカニズムを明らかにする。

1970～80年代の「一億総中流」現象は、「階層」という言葉が社会的な関心を集めるきっかけとなった。しかしその後、バブル経済の到来とともに、階層意識研究は過去のものとなされ、階層的地位(産業・階層システム)と階層意識の関係説明は、空白領域として残されることになった。

けれどもリーマン・ショック以降、雇用の流動化や下層の生活困窮がいわれるようになり、意欲格差や希望格差が明瞭になっている(はずだ)とする時評言説が再び耳目を集め始めた。その後わたしたちは、東日本大震災からの復興という、豊かさ・格差・不平等の、根本からの再考を要する課題に直面している。

平成の四半世紀の日本社会の構造変動と、「総中流」から「総格差」への風潮の変化の関連性の説明は、重要な課題であるといえる。

【研究の方法】

この研究プロジェクトは、2015年に大規模な階層意識調査を実施し、過去との比較研究と将来的な継続の基礎固めを行うものである。

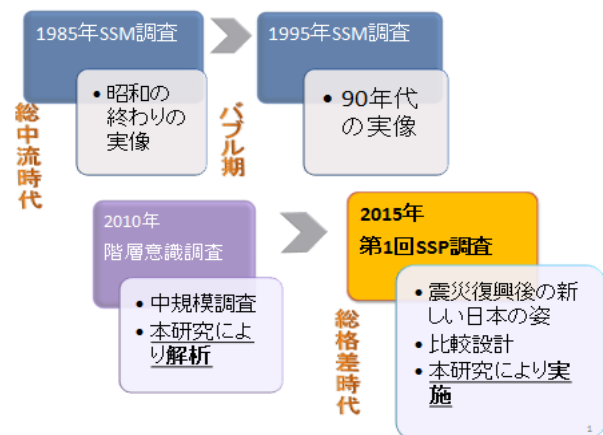
調査の名称は**2015年第1回SSP(社会階層と社会意識全国)調査**である(SSP: Social Stratification and Social Psychology Survey)。

この調査の特徴の第1は、階層研究に豊富な知見をもたらした1985年1995年SSM(社会階層と社会移動全国)調査を比較対象データとみなして、厳密な繰り返し調査設計をとることにある。

特徴の第2は、調査実施以前の3年間に周到な仮説構築を行うことである。これは2010年に実施した中規模調査のデータから帰納的に実態を測定する研究と、階層認知、公平、満足、信頼などの実験シミュレーションに基づく数理演繹の理論構築によって、複眼的に遂行される。

2015年第1回SSP調査は、20～69歳の男女を層化多段無作為抽出し、訪問面接調査により全国

750地点、10,500ケースを対象とするもので、日本の社会学の最大規模の調査の1つとなる(予定)。



第1回SSP調査の位置づけ

【期待される成果と意義】

本研究では、高度経済成長後と現在の日本社会の相対的な関係性を知る比較データを解析し、広い意味での階層研究の視座からの「時代診断」を提示する。SSP調査の設計・実施は、2010年代の日本社会がどのようなものであったのかという里程碑を将来に残すとともに、社会調査の実査環境の悪化に対応する実践力を養う機会ともなるだろう。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

吉川 徹, 2009, 『学歴分断社会』筑摩書房, p1-229.
吉川 徹編著, 2011, 『長期追跡調査でみる日本人の意識変容—高度経済成長世代の仕事・家族・エイジング—』, ミネルヴァ書房, p1-244(予定).

【研究期間と研究経費】

平成23年度—27年度
111,600千円

【ホームページ等】

<http://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/>
<http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp/>